

岡本博司先生を偲ぶ

—温顔，温厚，心のやさしい人柄—

商経学部教授 浅井茂紀

大学院の特任教授・岡本博司先生は，温顔，温厚で心のやさしい人柄であった。岡本博司先生は，大蔵省数年間勤務後，私より1年早く千葉商科大学に勤務されていた。先生は，四国の徳島県出身とのことであった。私も数回程，徳島には行ったことがあるので，この点で，先生の財政学や私の哲学，早稲田大学の校歌「都の西北」よりも話しやすかった。徳島は，眉山山頂から市内が一望でき，太平洋の白波寄せる海岸が見渡せ眺望絶景である。渦巻く鳴門海峡や阿波踊りで有名であるが，藍染めの土産店などもある。かつて，先生からは，徳島海産の「ワカメ」（若布）などを送って頂いたこともあった。

先生は，一度，北海道旭川市に行き，開拓時代の農耕用器具を見てきたことも私に話された。お互いに，本学キャンパス内はもとより，入試の際の控え室や通勤途中，何かと気楽によもやま話をした。また，箱根の忘年会では別室で同席したこともあった。

先生が，就職部長に就任した当初，当時，商大の2号館の就職課に私を案内して，先生は，「職員が狭い室内で一所懸命に働いているでしょう」と私に言われたが，同感であった。現在は，それは本館に移られて営業されているが，隔世の感がある。

先生が，商経学部の定年前年度，大教室で，財政学の試験直前に真剣に難解なスピーチをされたのに対して，多数の学生達が雑談もせず熱心に聴いていると，試験監督者の一人であった私は思った。更に，定年後は，研究館のサロンで，特任教授の岡本博司先生 [財政学]，名誉教授の奥田俊介先生 [英米文学] と私 [哲学] の3人程で，時々授業や健康について話したことがある。

やがて，晩年，岡本先生は，車椅子を使用した。商大からの通報で，国府台病院に入院された時，急遽，私が，花を持ってお見舞に行くと，奥様がおられ，先生は，病室のベッドで，「過去に6回も倒れたことがある。その一つは東京・新宿駅構内

の階段で倒れて、複数の警官達が事件かと思って来た」と、更に、「秋、京都の学会に参加したい」と私に話されたので驚いた。私は、先生が、この時初めて倒れたと思って駆けつけたのである。

私は、「先生、生命あつての物種です。ご無理なさらないで」などと言ってあげた。先生は、退院後研究館の職員押元さんの手を借り、車椅子で講義を続けられた様子であったが、～享年72歳。今後、二度と生前のお姿が見られないことは誠に残念至極である。

なお、西東京市保谷での岡本先生の通夜の時、生け花をなさるといふ奥様から色々承ったが、お子様はお二人との事でした。その長女は、既に嫁いでいる由、次女のお嬢様は未だ独身のようで綺麗で素直なお方である。

かくして、何分ささやかな追悼文で、誠に申し訳ないが、最後に、特任教授であられた岡本博司先生のご冥福を心からお祈り申し上げます次第である。